

時間副詞「いま」について

金 英児*

目 次

1.はじめに	4.過去を指示する「いましがた」
2.「いま」	5.「いまに」
2.1 現在	5.1 現在への継続用法
2.2 ごく近い過去	5.2 未来に関わる用法
2.3 近接する未来	5.2.1 近い未来
3.現在を指示する「いまは」・「いまでは」・「いまや」・「いましも」	5.2.2 事態実現への確信
3.1 「いまは」	5.2.3 事態実現への期待
3.2 「いまでは」	5.3 過去に関わる用法
3.3 「いまや」	6.ごく近い未来を指示する「いまにも」
3.4 「いましも」	7.まとめ

1.はじめに

「いま」という語は、まず、「今という時代」・「紅葉は今が見頃だ」などの場合、<現代・現在>の意味の名詞である。

- ・『岩波国語辞典』①過去とも未来とも言えない時。(ア)過去と未来との境である時間。

* 韓南大学校 日語日文学科 時間講師, 日本語学

このように、今現在のこの瞬間を指示する語である。概念的にはそのような時間の幅のない「いま」が想定されるが、実際には瞬間を捉えて言うことはない。

- ・『岩波国語辞典』①(イ)今(ア)を含んだ、ある時間・期間。今日(こんにち)。
- ・『明鏡国語辞典』①話し手が話している、この瞬間。過去と未来の接点となる、現在の時点。また、それに多少の時間の幅をもたせたもの。現在。

このように、本来的な自然な意味で延長された幅を持って用いられるのが普通である。ところで、配達を催促された時に使う「いま、出ました」とか、「いま、会いに行きます」などは副詞である。

- ・『岩波国語辞典』(ウ)今(ア)と見なせるほどに近い過去、または未来。
- ・『明鏡国語辞典』②ごく近い過去を表す。少し前(に)。
- ③ごく近い未来を表す。少し後で。今すぐ。
- ・『小学館日本語新辞典』①ごく近い未来に関していうさま。ほんの少しのちに。すぐに。
②ごく近い過去に関していうさま。ほんの少し前。ついさきほど。

「いま、出ました」は、ごく近い過去、「いま、会いに行きます」は、一般的な使用なら「今すぐ」に相当し、未来を表す。副詞の場合は、このように、現在だけでなく、近接する過去・未来をも表し、意味の幅を持つ。

さらに、「いま」に助詞が複合した語形のものも多くあり、基本の語である「いま」の意味の広さのために多様な意味を表す。たとえば、「今は・今や・今しも・今に」などである。これらについては、仁田(2002)¹⁾では、「「今」は発話時そのものを、また、発話時前後の時間帯をも指示する成分で」、「文のテンスとして、過去も現在も未来も簡単に取りうる。」そして、「「今」を含む時の成分は多彩である。」として、「今ニ」・「今シガタ」・「今ハ」などの語を挙げて、「これらの中には「今」に取り立て助辞の意味を付加するだけでは、全体の意味・用法を取り出せない、慣用化したものも少なくない。」と述べるが、同書は、副詞及び副詞的表現全般を体系的に分析・記述し、組織化することを目的とするため、著者も「個々の用法については興味深いところがあるが、ここでは触れ得ない」と述べて、「今ニ」他の語の分析には及んでいない。

「今」に時や場所を示す助詞「で」と〈取り立て〉の「は」が付いて、過去に対比的に今を提示する「今では」に対して、並列・同類を表す「も」が付いて過去からの継続を示す「今でも」がある。同じく、時を表す助詞として「に」があり、「今に」を作るが、「今には」はない。「今にも」はあるが、過去からの継続の意にはならない。また、「今

1) 仁田義雄『副詞的表現の諸相』(2002) (pp.208~210)

に」はあるが、「今で」はない。このように、文法的には意味を捉えにくい「今」と「今」を含む副詞について、実際の用例に基づいて意味・用法を考察するのが、本稿の目的である。

ところで、前に掲出した『岩波国語辞典』・『明鏡国語辞典』では当該項を名詞とし、『小学館日本語新辞典』では副詞とする。つまり、「いま」は名詞から副詞へ連続する語で、品詞論的な問題も含むのであるが、本稿ではその問題には触れない。取り上げる語としては、「いま」を話題として捉えるものは除くが、時の表現として副詞的であるものを広く考察の対象とする。

2. 「いま」

2. 1 現在

日本語では動詞の原形は、通常未来のテンスとなるので、現在を表すには、何らかの表現が必要である。

- (1) 「いま新宿で飲んでるんだ。出て来ないか。まだ早いだろう」
しかし相手の学生は、いま仲間と麻雀をやっているからと言って、彼の誘いをことわった。
(石川達三『青春の蹉跎』)
- (2) ドストエフスキの罪と罰という小説を、今私は読みつつあるところだが、この小説には、通俗小説の概念の根柢をなすところの、偶然(一時性)ということが、実に最初から多いのである。
(横光利一『純粹小説論』)
- (3) 「鉄道本部内でいま議論の真っ最中だ。……」
(朝日2005.12.31.朝刊)

(1)はもともと典型的な形で、動詞の継続相の現在形「…テイル」と共存して、現在継続している状態であることを表し、(2)は「…ツツアル」と反復継続を用いるもの、(3)は名詞文だが、「…中」のような、現在進行中の事態であることを表す語を伴って、現在を表す。(1)では、新宿で飲んでいる数時間の幅を現在と区別することのできない連続的な、均質な時間帯と捉えて「今」と言うものと考えられる。この時間の幅は、(2)(3)では数日から数週間、あるいは、数ヵ月に及ぶことも想像される。これは、名詞「今」の伸縮自在の性質をそのまま受け継ぐものである。

- (4) 電話口に出たのは、黒谷のおふくろであった。……／「あら、山本君？ 昨日、明倫、いかがでした？」／「それが、僕、見に行かなかったんです。久男君は、行かれました？」／「ちょっとお待ち下さい。今、久男が来ましたから」／「おい、どうだった？」／太郎は、代って電話口に出た黒谷に尋ねた。(曾野綾子『太郎物語』)

来るといふ動作が完了して、来ているという状態となったことを表すが、このように現在の完了は瞬時に過去となる。この場合、「今」がなくても事態は変わらない。発話者が、久男の来ることが完了した時点と現在とを懸隔のないものとして捉えようとする意識が「今」の語に表されたものと考えられる。

- (5) 考えてみれば私はもう八年もこのアパートに住んでいるのだ。八年前この部屋には私と妻と猫が住んでいた。最初に去っていったのが妻で、その次が猫だった。そして今、私が去り行こうとしている。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (6) 「理想郷などと言っても態のいい開拓じゃないの、馬鹿げた話よ」
「理想郷の建設は結婚する前からの志方の望みだったのよ、それが今、ようやく実現しかかっているのよ」(渡辺淳一『花埋み』)

(6)は、「シカカル」の継続相と結びついて、現在において、もう少しで実現できそうな状態であること、その実現に向かって進行していることを表す。(4)・(5)・(6)は、「今」が過去、あるいは未来へ拡張していく中間的なところに位置する例といえるだろう。

2.2 ごく近い過去

- (7) 風の音を聞いた。突風だと思った瞬間、彼は背を低くして、風にこたえる体勢を取った。眼の前が混雑した。……(雪崩が起きたのだ)……風は止んだ。加藤は立上って、いま眼の前で起った、雪崩を確かめようとした。(新田次郎『孤高の人』)
- (8) 「ありがとう」眠っていると思った有里が、寢言のような声で呟いた。目は閉じたままだ。「いま、夢を見ました。大津皇子が出てきはる夢です」(内田康夫『箸墓幻想』)
- (9) 「…、いま奈良駅に着いたところです」(内田康夫『箸墓幻想』)

いずれも動詞の完了形「…タ」と共存して過去を表す。(7)は「いま…タ」で直前の過去の出来事を表し、(8)では、継続相の過去形と共起して発話時点の少し前まで「夢をみる」という状態が続いていて、直前に完了したことを表す。(9)は、「…タトコロ」で、前接する動詞が示す動作の完了直後であることが明瞭である。これらは、たとえば、「今さっき」、「さっき」などの表現に置き換わり得るものである。

2.3 近接する未来

- (10) 「どうもうっかりいねむりしちゃってすみませんでした。いまお茶淹れますから……」と、ぼくは自分でもじつに卑屈でいやだなあ、と思えるくらいの明るい声で言った。
……「お湯わいてるよ。ぼくがやろうか」と、松井喜三郎が入口に顔を出して言った。
……「あ、いいです、いまやります」(椎名誠『新橋烏森 青春篇』)
- (11) 看護婦は彼女を支えていた手を少しずつ放しながら、
「もう止まったわね。……すこうし、そのままじっとしていらっしゃいね」と言って、乱れた

- 毛布などを直したりしはじめた。「いま注射を頼んで来て上げるわ」(堀辰雄『美しい村』)
 (12)「まだ寝ずにいるのかえ」
 「今、寝るところなんだ」 (田山花袋『田舎教師』)

これらの「今」は、「すぐ」・「これから」に置き換えられ、近接する未来に動作が行われることをいう例である。これらは動詞の現在形を取り、「…ウ」・「…ヨウ」などの推量形は取らない。そのような意味で、通常の未来表現とは質を異にする。

以上の例、すべての「いま」について言えることは、仮に「いま」がなくても、表す意味内容に不明や混乱は起こらないということである。(1)のような動詞の継続相の現在形が、経験や完了を表す場合があるというものの、このような会話では状況に依存して、誤認が起こることはまずない。(1)の例においては、「いま」はなくても、やはり、意味内容は変わらないだろう。では、「いま」のもつ意味はどう考えられるだろうか。たとえば、(6)の例では仮に「いま」がなくなると、望みの実現がいくらか遠のく。遠のくと言っても、時間的な隔たりが増すというのではなく、現在と望みの実現との間に、一つ二つの越えるべき問題がありそうになる。そこへ「いま」が置かれると、発話者の心情としては現在と連続する時間のうちに望みが実現すると捉えられていることが感じられる。(10)(11)の場合は、「今」を置くことで、他のことに優先してすぐに行動に取りかかるさまが加えられる。しかし、「すぐに」・「急いで」に置き換えてみると、「すぐに」・「急いで」が時間的な懸隔の小を言おうとするのに対しては、「今」は現在の状況との連続のうちに行動することを表していると考えられる。つまり、現在と事態完了が状況として連続、直結していることを表すのが「いま」である。用例の多くが発話であるが、発話者の、事態完了と現在との連続意識・状況の均質性を「いま」は表しているのである。

3.現在を指示する「いまは」・「いまでは」・ 「いまや」・「いましも」

3.1 「いまは」

「いまは」は、係助詞「は」で「いま」を取り立てて言う表現である。

- (13)時代は変わった。中心にあるのは女性の自己実現。かつては男に依存してシンデレラになったが、いまは男に頼らず自力でシンデレラになる。(朝日2003.6.26.夕刊)
 (14)少年院も満員だという。「以前なら『暴力行為』で入ってきていたような子が、いまは『傷害』で入ってくる。同じ行為でも警察が重い名前をつけてくる。正直、少年院じゃなくてもいいんじゃないかという子もきます」(職員) (朝日2004.11.5.週刊朝日)

「今」を取り立てて提示するため、(13) では、対照されるものが「かつては」と、同じく「は」で提示される。(14) では「以前なら」と示されるが、このように、対比されるものが、二項対立的に示されるのが特徴である。対立項が明示されず、「今は」だけで、以前はそうではなかったと暗示されることもある。

- (15) (今は辛くても、きっとこのことも、結果としてはよいことであったという日が来る。神が生きておられる以上、信夫のことも、神が守って下さるにちがいない) / 菊はそう思っ
て耐えてきた。(三浦綾子『塩狩峠』)
- (16) 桃子は自分がどうい学校へ行こうがちっとも関心がなかったが、父親にそう言われてみると、急に学習院とやらへ行ってみたくなった。そうすることによって、今は榆家の子供たちの中で数にも入らない自分もひょっとしたら姉たちの仲間入りができるのではないか? しかし学習院の編入試験は競争率が高かった。
(北杜夫『榆家の人びと』)

このように、未来に対して「今は」が用いられる例もあるが、その場合は対立項が明示されない。確定的な事柄として提示できないからであろう。

3. 2 「いまでは」

「いまでは」は、格助詞「で」で「今」という時間を示し、係助詞「は」はそれを取り立てる働きをする。

- (17) 横浜市金沢区の野島公園内の市野島青少年研修センターで毎年この時期、障害のある子どもたちに向けた泊まりがけのクリスマス・イベントが開かれている。今年10周年を迎えた。……「野島クリスマスキャンプ」と名づけられた。昔は参加者を集めるのに苦勞したが、いまでは施設の規模に入りきれないために定員を制限しているほどだ。
(朝日2005.12.18.朝刊)

前項「今は」と同様に、「昔は」と対照的に「今では」が用いられ、「今は」との置き換えも可能で、「今は」と「今では」の近似を示している。

- (18) 女子高生の使い方をメーカーが参考にして機種改良し、その新製品を女子高生がふたたび使いこなす。このキャッチボールで日本の携帯も携帯文化も進化し、発展してきた。いまでは標準装備になった「着メロ」も「写メール」も彼女たちの要求を取り入れた結果だ。
(朝日2004.5.31.アエラ)

(18)では、女子高生とメーカーのキャッチボールによって、携帯も携帯文化も進歩・発展を続けてきて、その結果として、以前と対照的な現在の状況がある。「今は」の対照性と比較すると、「今では」には以前からの漸進性が認められる。

(19)だが、単にひさは、幾代もの血の淀みからくる古びはてた品位の中にしづまっている女にすぎなかったのだろうか。いや、とんでもない。一面からみれば、現在の検病院をつくりあげたのは院長夫人だともいえるのだ。／……はじめは苦しかった。基一郎の派手好みは極端だったし、狭い医院には食客の書生たちがごろごろしていた。彼らが勝手気ままに香の物にかける醤油にすら、家計をあずかるひさは気をくばらねばならなかった。彼女は醤油を多量の水で薄め、塩を加えた。万事につけそのくらの気苦労をしたのである。そして基一郎の留学中はどうだったか。その留守中、医院の看板をしっかりと守り、雇いの医者を監督し、以前に劣らない形で帰朝した夫に引渡したのは誰の功績か。彼女の皺、皮膚が白すぎるのとその髪が浅いためあまり目立たないとはいえ、一見おっとりとして微動だもしない顔に刻みこまれた無数の皺こそ、その証明にほかならなかった。／今では検病院は安定し、発展の頂に達し、——基一郎だけはそんなことは夢にも考えなかったが——ひさの苦勞の種は大半失われた。

(北杜夫『検家の人びと』)

(18)の「今では」は「今は」に置き換えることもできるであろうが、(19)では「今は」に置き換えにくい。「今では」は、このように、以前からの漸進的変化の結果としての現在を提示するところに特徴がある。したがって、未来と対照される「今では」はない。

3. 3 「いまや」

「いまや」は、詠嘆・強意の間投助詞「や」が付いた語で、「今」を強調する表現である。

(20)東京都の生協である「東京マイコープ」のライフプラン・アドバイザー(LPA)の村上清水さんが、主婦たちに保険の仕組みを説明している。この日は保険と貯蓄の関係を説明するために、養老保険の話になった。「養老保険は、保険期間中に亡くなったら死亡保険金、満期には満期金が受け取れる商品です。でも、いまは20年間で保険料を240万円払っても満期金が239万円ということがあります」。養老保険といえば、かつては「高利回りの貯蓄商品」といわれ、「多額の配当も受け取れますよ」と薦められて買った人も多いただろう。それがいまや、払った保険料分さえ返ってこない「元本割れ」の可能性があるとこのうのだ。
(朝日2003.4.18.週刊朝日)

(20)では、意味的には同じ内容を指示して「今は」と「今や」が用いられている。「いまは」は、専門家が「養老保険」について説明する文中にあって、過去を暗示的に対比するが、客観的な落ち着いた口調である。それに対して、「いまや」は養老保険を購入した人の立場から「かつては」と過去を明示的に対置して、「いまは」で提示された現在の状況を口語的にわかりやすく繰り返すところで、驚きや不満の感情を込めて用いられている。このように、強意的に「今や」は用いられる。

(21)現在、指紋照合システムは、マンションの共同玄関だけでなく、個別のドアや一戸建てにも広がり始めているという。設置費用は25万~30万円ほどだ。「日本では、水と空気と安全はタダで手に入るものだと思われてきた。しかし、まず水を買うようになり、いまや安全もお金を出して買う時代になったんです」(松本氏)(朝日2003.2.14.週刊朝日)

(21)では、客観的な説明の部分では、「現在」という語を用い、同様のことをコメンテーターが感嘆の気持を込めて言うところでは、「いまや」が用いられている。安全が過去にはただで手に入るものだと思われてきたという前提があって、そのような過去と対比的に、お金を出して買う時代に変化した現在の状態を強調するのである。(21)のように発話で用いられることもあるが、日常会話で用いられることはなく、ややかたい語である。

(22)「いまや正社員なら、一般職も総合職も関係なく、サービス残業も休日出勤も当たり前になってきた。それができなければ、派遣やパートになりなさい、ということ。人材を育てず、使い捨てにする傾向が強まっています」と指摘する。(朝日2004.2.2.アエラ)

(21)では、「まず水を買うようになり」、(22)では「…てきた」・「傾向が強まって」の表現に窺えるように、事態の推移・変化が徐々に進行してきて、その極限である今を「今や」と詠嘆的に強調する。「今は」が以前の事態と対比的に現在を提示したのに対しては、「今や」は以前から事態が徐々に推移してきて、その変化の頂点として「今」を捉える傾向を特質とすることができよう。

3. 4 「いましも」

「し」は副助詞で、それと強く指し示す機能を持つとされる。

(23)ようやく栈敷の通路を行きかう人の列が多くなり、大鉄傘の下全体が、ときおりの歓声や嘆声を別として、わーんとしたにふいどよめき、人いきれに満たされてこよとしていた。／そのとき、土俵の上では二人の力士が今しも四股を踏みだしたというのに、場外れなまばらな拍手が起った。(北杜夫『楡家の人びと』)

(24)藤木の声が僕の内部を爽かに突き抜ける。僕は眼を開く。すると村の方角に点々とする灯影の背後、黒々とした山の端から今しも満月をやや過ぎたほどの月が昇って来る。(福永武彦『草の花』)

このように、現在を強く指示して、「まさに今」との置き換えが可能である。同じく「今」を強調する「今や」と比較すると、「今しも」は(23)では「四股を踏みだし(た)」、(24)では「月が昇って来る」に示されるように、新たな事態の開始を言うところに特質があると考えられる。

- (25) そのニコロが、商館の一階にある診療所から出ようとしたところで、今しもそこに入ろうとしたトレヴィザンと出交した。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)

このように、未来に関わっていかうとする表現である。ただし、「今しも」はややかたい文章語で、使用範囲は限られ、例は多くはない。

- (26) 青森県出身の彫刻家であり、その造形の中に縄文のDNAを潜ませた成田亨描く異形のものたちがいましも立ち上がりそうな、得体の知れない気配と可能性をはらんでいる。(朝日2004.7.12.アエラ)

- (27) いましも飛び立とうとしているその天使は、顔を過去のほうにむけている。私たちが「出来事の連鎖」を見るのに対して、歴史の天使は瓦礫のうえに瓦礫が積み重なってゆく「ただひとつの破局」を目にする。(朝日2003.5.15.夕刊)

このような硬質の文章のなかで、「いましも……シソウナ」、「いましも……ヨウトシテイル」の、比喩的な類型表現に偏在化していく傾向にあり、若い人にはほとんど用いられなくなっている。

4. 過去を指示する「いましがた」

「いましがた」は副助詞「し」と名詞「方」が付いた語形で、直近の過去を表す。

- (29) 昨夜、台所の竈台の下空籠の中で、犬のピンがうめいたり叫んだりして居たが、到頭四疋子を生んだ。……つい今しがた母胎を出たばかりなのに、小猫の様な啼声を出して、勢猛に母の乳にむしゃぶりつく。(徳富健次郎『みみずのたはこと』)

(29)では、時間の隔たりが僅かであることを表す「つい」・「…タバカリ」などと共起して、子犬が直前に「生まれ」たことが強調する。「し」は強く指し示す機能を持つと言われ、犬の子が生まれた時点が直近の過去であることを強く指示すると考えられる。

- (30) 町村外相は22日午前の衆院外務委員会で、アジア・アフリカ会議首脳会議にあわせて開く方向で調整している日中首脳会談について、「今しがた状況を確認したが、(中国側と)きちんとした連絡、調整をとれていない。まだ確定していない。……」と語った。(朝日2005.4.22.夕刊)

- (31) 戦争の始まった20歳のころ、……真夜中1時半。台所からそっと入ると裸電球の下で母が内職をしていた。「おとつあんは本当に優しいね。お前が帰ってきたら家で飲む

ようにと、ウイスキーを置いて今し方寝たとこだよ

(朝日2004.10.31. 朝刊)

(29)(30)ともに発話で、文章語ではなく口頭語的と見られるが、(30)は83歳の筆者が20歳の頃を回想する文章で、使用者の年齢の高さが知られる。助詞「し」は、現代ではほぼ造語能力を失った古語で、前述の「今しも」と同様、若い人に用いられることはほぼなくなっているようである。若い人の口頭語では、「さっき・今さっき」などに交替している。

5. 「いまに」

「いまに」は、時を示す格助詞「に」が付いた語形だが、多様な意味・用法の展開を持つ。

5. 1 現在への継続用法

以前から現在に至って、事態が継続していることを表す。

この用法は、『日本国語大辞典』によると、平安時代から見える語で、「下に打消の表現を伴うことが多い」と説明されており、古代ではこの用法が主であった。

- (31)母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮っていた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖の様に云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじが有ったもんだ。(夏目漱石『坊っちゃん』)
- (32)…且は臨終の苦患の可哀さに、安心をさせようと、一心配をするな親仁、鐘は俺が撞いてやる、一とはつきり云うと、世にも嬉しそうに、ニヤニヤと笑って、拝みながら死んだ。その時の顔を今に忘れん。(泉鏡花『夜叉ヶ池』)

近代に至っても、このような否定表現を伴う例を見つけることはできるが、決して多くない。

- (33)で、せきはそれなりに直ったが、せきの上を一番気遣った姑親が最後に同じ病気に罹り、これは肺炎に進み遂に亡くなった。／——その時から今に三年経つ。(志賀直哉『雨蛙』)

このような、否定表現を伴わない例も現れている。

- (34)老いた母を思い、古里の山容をおもう若き戦士。その痛恨の思いは今に忘れがたい。旧福野町出身、白秋の門下「多磨」の歌人だった。(朝日2005.5.26.朝刊)
- (35)近江商人屋敷がある金堂地区から東へ約1・5キロの小幡地区には、県伝統的工芸

- 品に指定されている「小幡人形」がいまに伝わる。 (朝日2005.11.14.朝刊)
- (36)城下町の面影をいまに伝える村上市の町人町で、60軒の町屋が参加した「町屋の屏風まつり」が開かれている。 (朝日2005.9.23.朝刊)
- (37)和歌山市中心部の「ぶらくり丁」を貫いて南北に走る築地通り。…… 藩政期以来のれんを守る老舗や長く崇敬を集めてきた古社など、今に息づく歴史を訪ね、苦境に立ち向かう新しい息吹にも触れながら通りを歩いた。 (朝日2005.11.21.朝刊)

(34)～(37)は最近の例であるが、(34)の「忘れがたい」は「忘れられない」と等価と見てよいから、(31)(32)に連続する用法で、全体も古風な印象の文章となっている。(35)～(37)は継続を表す動詞の現在形に続く用法であるが、3例とも表現内容が類似している。このように、「伝える・受け継ぐ」に類する動詞と共起して、歴史や伝統などについて伝承・維持の意を表す、類型的な例が圧倒的に多い。また、継続相を表すアスペクト形式と共起する例が現れている。

- (38)日本のバブル崩壊期に中国は改革を機に驚異的な成長をして経済大国化した。他方、日本は何ら改革に着手しないまま「失われた10年」を今に引きずっている。 (朝日2005.9.2.朝刊)
- (39)私の新聞好きはその当時から今に続いています。 (朝日2005.10.14.朝刊)
- (40)水へのこだわりは形を変えながら、今に受け継がれている。 (朝日2005.10.28.朝刊)

このように、継続性をアスペクト形式「シテイル」で顕在化し、継続の意味がさらに明瞭に表されている。

以上のように、以前から現在への継続を表すが、この用法はややかたい文章語で、日常会話では用いられない。日常的には「今でも・今まで…している」に交替しているようだが、「今に」には、淡々とした、ひたすらな継続性が感じられ、そのようにしてこれから後も維持されていこうという暗示がある。現代でもそのような古風な格調を持った表現としての意図的な使用が見られる。

5. 2 未来に関わる用法

「今に」について、仁田(2002)では、発話時以後を表す類に掲げられ (p. 216)、『基礎日本語辞典』・『例解新国語辞典』・『表現類語辞典』などでも、現在への継続の意味は取り上げられず、近い将来に関わる意味だけを挙げている。このように、「今に」は、現代語では未来への実現を表す用法を中心として扱われている。

5.2.1 近い未来

- (41)「田中はどこへ行った？」/「田中は落ち葉を運んでいったから、いまに帰ってきます」/
落ち葉を運んでいった六、七人の生徒が駆け戻ってきた。その中に田中が交じっていた。
(佐左木俊郎『錯覚の拷問室』)
- (42)焼肴に青いものをあしらって、椀の蓋をとれば早蕨の中に、紅白に染め抜かれた、海老を沈ませてある。ああ好い色だと思って、椀の中を眺めていた。「御嫌いか」と下女が聞く。「いや、今に食う」と云ったが実際食うのは惜しい気がした。
(夏目漱石『草枕』)

このように、「いま」と同様に、現在形を伴って近接する未来を表す。

5.2.2 事態実現への確信

- (43)その日自分は父に伴れられて上野の表慶館を見た。今まで彼に随いてそういう所へ行った事は幾度となくあったが、まさかそのために彼がわざわざ下宿へ誘いに来ようとは思えなかった。自分は父と共に下宿の門を出て上野へ向う途々も、今に彼の口から何か本当の用事が出るに違いないと予期していた。
(夏目漱石『行人』)
- (44)兄さんも、この頃は、すっかり酒飲みになってしまった。小説もあまり書かない。けれども、僕は兄さんをあくまでも信じている。いまに、きっと素晴らしい傑作を書くだろう。とにかく、ただものでないんだから。
(太宰治『正義と微笑』)
- (45)「いいえ、自分を偉いと思う人間に、偉い人はいないのですよ。このことは今すぐに信夫さんにわかるかどうか……。とにかく、今に思い当たる時がくると思いますがけれど」
(三浦綾子『塩狩峠』)
- (46)「梯子をかけて、人の屋敷へ入ったって？お前たち、今からそんなことを覚えると、いまに大泥棒になってしまうぞ」
(中里介山『大菩薩峠』26 めいろの巻)

(43)では、「に違いない」、(44)は、「きっと…だろう」の形で、事態が実現することを強く確信する意を表す。(45)の例では、「今すぐに」はわからないだろうが、そのうちいつかわかるだろう、と言うのである。「とにかく」に確信が表されている。また、(46)は、本当に大泥棒になることを期待しているわけではない。「今からそんなことを覚えると」という仮定条件の結果として大泥棒になることを確定的に言うのである。これらは、事態の実現を確信するが、必ずしもその時期を近い未来に想定しているものではない。事態実現が確実であると確信しているために、近い未来でなくても、現在と連絡していることとして「今に」と表現するものと考えられる。このような例は、ここまで取り上げてきた「いま」が持つ現在に近接する時間帯の幅で過去・未来を表していた種々の用法のありようから逸脱するものである。

5.2.3 事態実現への期待—慣用表現「今に見ていろ」—

- (47)早瀬が死ぬと、とつぜん、人びとは異様に活気づいた。……「ちくしょう。」

「いまにみている。」彼等はいきり立ち、肩を叩きあいながら報復をかたく誓いあつた。
(三浦哲郎『忍ぶ川』)

- (48) 父親が事業に失敗し、小学校4年で家族は離散。貧しかった。プロレスラーになってからも病気、ケガ、挫折、失敗、中傷、侮辱、差別……とあらゆる困難を味わった。「負けてたまるかあつ、いまにみとけ!」と、自分を励まし続けた人生。
(朝日2005.12.5.朝刊)

これらは、報復や逆境の克服を誓う時などの慣用的な表現である。見せつける相手はない場合が多く、また、事態実現の時期は相当に遠い未来である。しかし、現在とかけ離れた未来ではなく、現在と連続した時間の中で事態を実現させたいという強烈な願望がある場合に、このような表現が現れるものと考えられる。

5.2.4 過去に関わる用法—慣用表現「今に始まったことではない」—

- (49) 「あなたへのご執心は今に始まったことではないのですもの。…」
(田辺聖子『新源氏物語』)
- (50) 青山の家族からの手紙は、そんなに繁々とは来なかった。従兵たちは、／「長官の奥さんはつめたい」／と、憤慨していたというが、これは今に始まったことではなく、どちらがつめたかったのかも分らない。
(阿川弘之『山本五十六』)

この「今に始まったことではない」は、ずっと以前からそうであったということを強調して言う慣用表現である。類似の表現に次のようなものがある

- (51) 今の少子化は昨日や今日に始まったことではない。 (読売2003.12.20.朝刊)

この表現と対応させると、「今に」は「昨日や今日に」に対応し、直近の過去を指示していると考えられる。

「今に」について、過去に関わる用法を取り上げている辞書・解説書などを見ないが、慣用的な類型表現ではあるけれども、ここに、過去を指示する「今に」を指摘することができる。この用法を認めるなら、「今に」は過去・現在・未来のすべての時制に関わる用法を持つことになり、副詞「今」と対応する。

6.ごく近い未来を表す「いまにも」

「いまにも」は格助詞「に」と係助詞「も」が付いた語形で、近接する未来を表す。

- (52) 今にも小江が見えたら機会を逃さずこれを渡さなければならぬ。彼はそう思って手紙を握ったままその手を袴の割れ目に入れて待った。手から出る油で手紙がじめじめしているのがわかった。
(志賀直哉『赤西蛎太』)

(53) 今にもトルコの軍勢が地平線の彼方からあらわれるのを見る想いの中で、皇帝にやれたことは、できるかぎりの食糧の確保と城壁の補強だけである。

(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)

このように「今にも」は、近い未来に予期される事態を指示する。

この「今にも」について『表現を豊かにする 副詞』では、「マイナス的なイメージの副詞」、『現代副詞用法辞典』では、「ややマイナスイメージの語」と説明されている。

(54) ヤクルト2-1近鉄 第4戦(新世紀日本シリーズ) プロ野球

◇堅い守り、好機呼ぶ(セーフアウト)

ローズが、今にも走り出しそうだった。/同点の7回1死。北川への1球目に二塁を陥れられた球目。三塁も狙っているかのように、ローズは大きくリードをとった。ヤクルトのマウンドはこの回から番手のニューマン。投球動作が大きい。「走られたら完全にセーフだ」。遊撃手の宮本は感じた。(朝日2001.10.25. 朝刊)

日本シリーズで同点、回もつまって2 塁ランナーが盗塁を狙っている。点を取られそうなピンチ。遊撃手の宮本の「走られたら完全にセーフだ」という危機感を「今にも」は表している。そうなりそうだが、そうなったら困る、という危機意識がマイナスイメージと結びつくことは考えられる。

(55) 娘の第2子出産を1か月後に控えて、手伝いに行くため準備を始めた時だった。

「赤ちゃん駄目だったみたい」という娘からの突然の電話。私は取るものも取りあえず上京した。へその緒が絡まって胎内で心音が途絶えたのだという。手術に間に合わなかった私に、婿のお母さんが「抱いたらまだ温かったんですよ。今にもオギャーと声を上げそうな男の赤ちゃんだった」と泣きながら話された。私も泣きながら聞いた。

(朝日2005.12.28. 朝刊)

抱くとまだ温かく、死産であることが信じられないで、行きていてほしいと願う気持ちが、「今にもオギャーと声を上げそうな」にこもっている。オギャーと声を上げることが実現しないことを承知していて、その裏返しを切望するのである。そのような願望の裏返しを言う、このような慣用的な用法が「今にも」にはあり、また、切迫していると捉えられる事態には、マイナス事態が相対的に多いであろうから、前掲の辞書のような解説が行われたものと考えられる。しかし、それが「今にも」の語性とは認め難い。

(56) 猿が申(さる)に歯をむいた。大阪・北摂の箕面の森。約10メートルの距離で、数秒間にらみ合った。今にも飛びかかろうとする迫力に30代半ばの申年の私はたじたじとなり、色づき始めた遊歩道を引き返した。(朝日2005.11.5.夕刊)

(57) 久しぶりに早く帰宅した夫が4歳の息子に、寝る前に絵本を読んであげた。「さみしい

な、さみしいな……」というところは、いまにも涙を流さんばかりに、「楽しそうに……」というところは、笑いながら両手を広げて、いまにも飛び上がらんばかりに感情を込めて読んでいたら、途中で息子がひと言。「お父さん、もうちょっと薄く読んでよ」
(朝日2003.8.2.朝刊)

このような例に見られるように、「今にも」自体にはマイナスイメージはない。特にこれらの文章はユーモアたっぷりに叙述されており、「今にも…うとする」・「いまにも…んばかり」もコミカルな味わいを加えるために意図的に使用されている。

(58)われわれははじめは、自分たちがここにきてから四五日もたてば水島もくる——と、そんなふうに手軽に考えていました。今にもこの収容所の扉が開いて、そこに水島が元気な姿をあらわすか、と待っていました。そして、ときどき思わず扉の方を見たりしました。彼の靴の音がきこえたように思ったこともありました。(竹山道雄『ビルマの豎琴』)

(58)は、明らかに実現を期待する内容である。このような例に照らしても、「今にも」に、特に評価的なイメージを見出すことはできないと思われる。

ところで、(54)～(58)の例はすべて、「今にも…しそう・しようとする・せんばかり・するか」などの類型の表現で、実際に未来の事態実現に至るものではない。「今に」の機能などから類推して、「今にも」も本来、未来表現であったと思われるが、現代では、新たな事態が実現する直前の極限の状態であることを、緊迫感や切迫感を表すことを主眼として用いられるように慣用化してきたことが推量される。

7.まとめ

「いま」は名詞として今現在のこの瞬間を指示するが、実際には、自然な意味での時間的な幅をもち、その幅は関心に依りて伸縮のあるものである。そのため、副詞「いま」は助動詞層の表現に従って、ごく近い過去・現在・近接する未来を表し得る。そこで表される過去と未来は、現在と連続、直結するもので、そこに、発話者の事態完了と現在との関係意識を見ることができる。

さらに、「いま」に助詞などが付いて、多様な副詞を生み出している。

「いまは」は、「は」によって今が取り立てられ、以前の事態と対比的(対照的)に現在を提示する。「いまでは」は「いまは」と近似するが、「いまは」の対照性と比較すると、以前からの漸進的変化の結果として現在を提示する。未来に対して「いまは」は用いられる場合があるが、「いまでは」は以前からの漸次性のため、未来と対照される場合がない。

「いまや」は「いまは」と比較すると、以前から事態が徐々に推移してきて、その変化の頂点として「今」を捉える傾向がある。以前としての過去と変化した現在に対して、驚きや不満などの感懐を込めて用いられる。

「いましも」は、現在を強調する「いまや」と比較すると、新たな事態の開始を表す。未来に関わる用法もあるが、ややかたい文章語で使用範囲が限られている。

「いましがた」は、以前における完了を表す。「し」は強くそれと指示する助詞で、完了時点を直前のものとして強調して指し示す表現である。「いましも」と同様に、若い人に用いられることはほぼなくなっている。

「いまに」は、以前からの継続用法、近い未来に関わる用法、過去に関わる用法を持つ。継続用法は、「テイル」・「テアル」などを伴って、以前から現在への事態の継続を表すが、ややかたい文章語で、慣用的表現の固定化なども見られ、現代の日常会話などでは用いられなくなっている。近い未来に関わる用法は、ごく近い未来に事態が成立することを表す。また、「きっと」などとともに、成立する時間は不確定だが、発話者が実現に確信をもって言う表現もある。さらに、成立する時点も予定できないし、実現に対する確信も強くないが、実現を期待・予期する例もある。慣用表現で「今にみている」という句があるが、報復という事態実現は起らない場合がよくあり、「今に」の特徴を示している。最後に、近い過去に関わる用法は、慣用表現で「今に始まったことではない」というのがあがるが、ずっと以前からそうであったことを強調して表す。「いまに」は過去・現在・未来のすべての時制に関わる用法を持つことになり、副詞「いま」と対応する。

「今にも」は近い未来に予期される事態を指示する。「今にも」それ自体には評価的なイメージを見いだせない。本来、未来表現であったが、「いまにも……しそう・しようとする・せんばかり」などの類型の表現で、現代では、新たな事態が実現する直前の極限の状態であることを、緊迫感や切迫感を表すことを主眼として用いられるように慣用化してきた。

【参考文献】

- 市川孝・見坊豪紀・金田弘・進藤咲子・西尾寅弥（2004）『三省堂現代新辞典』第2版 三省堂.
- 北原保雄（編）（2003）『明鏡国語辞典』初版 大修館書店.
- 金田一京助・大石初太郎・佐伯梅友・野村雅昭（編）（2002）『新選国語辞典』第8版 横組版 小学館.
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（編）（2000）『岩波国語辞典』第6版 岩波書店.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2001）『日本国語大辞典』第2版 小学館.
- 林四郎・野元菊雄・南不二男・国松昭（編）（2006）『例解新国語辞典』第7版 三省堂.
- 藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭（編）（1994）『表現類語辞典』第6版 東京堂出版.
- 松井栄一（編）（2005）『小学館日本語新辞典』初版 小学館.
- 森田良行（1994）『基礎日本語辞典』第6版 角川書店.
- 山田忠雄・酒井憲二・山田明雄・柴田武・倉持保男（編）（2005）『新明解国語辞典』第6版 三省堂.
- 仁田義雄（2002）『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版. (pp.201～258)

<資料>

- ・朝日新聞（「聞蔵」検索（2003年1月1日～2006年12月））、読売新聞
また、次の作品は「青空文庫」から引用した。
- 曾野綾子『太郎物語』田山花袋『田舎教師』、徳富健次郎『みみずのたはこと』、中里介山『大菩薩峠』1 甲源一刀流の巻『大菩薩峠』2 6 めいろの巻、夏目漱石『行人』、新田次郎『孤高の人』、堀辰雄『美しい村』、横光利一『純粹小説論』
その他、単行本から引用した。
- 阿川弘之『山本五十六』、石川達三『青春の蹉跎』、内田康夫『箸墓幻想』、塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』、北杜夫『楡家の人びと』、志賀直哉『赤西蛸太』『雨蛙』、竹山道雄『ビルマの堅琴』、田辺聖子『新源氏物語』、福永武彦『草の花』、三浦綾子『塩狩峠』、村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、渡辺淳一『花埋み』

要 旨

「いま」は、名詞として今現在のこの瞬間を指示するが、実際には、自然な意味での時間的な幅をもち、その幅は関心に応じて伸縮のあるものである。さらに、「いま」に助詞が複合した語形のものが多くあり、基本の語である「いま」の意味の広さのために多様な意味を表す。これらに関する先行研究では、副詞及び副詞的表現全般を体系的に分析・記述し、組織化したものはあるものの、個々の意味・用法についての考察はほとんど行われていない。従って、文法的には意味を捉えにくい「今」と「今」を含む副詞について、実際の用例に基づいて意味・用法を考察した。その結果、「いまは」は、以前の事態と対比的(対照的)に現在を提示し、「いまでは」は以前からの漸進的変化の結果として現在を提示する。「いまや」は以前から事態が徐々に推移してきて、その変化の頂点として「今」を捉える傾向がある。「いましも」は、新たな事態の開始を表す。未来に関わる用法もあるが、ややかたい文章語で使用範囲が限られている。「いましがた」は、以前における完了を表す。「いまに」は、以前からの継続用法、近い未来に関わる用法、過去に関わる用法を持つ。「いまに」は過去・現在・未来のすべての時制に関わる用法を持つことになり、副詞「いま」と対応する。「今にも」は近い未来に予期される事態を指示し、それ自体には評価的なイメージを見いだせない。本来、未来表現であったが、「いまにも…しそう・しようとする・せんばかり」などの種類の表現で、現代では、新たな事態が実現する直前の極限の状態であることを、緊迫感や切迫感を表すことを主眼として用いられるように慣用化してきた。

キーワード：時間副詞 「いま」「いまは」「いまでは」「いまや」「いましも」
「いましがた」「いまに」「いまにも」

투 고 : 2008. 2. 29
1차 심사 : 2008. 3. 15
2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : (302-793) 대전광역시 서구 월평2동 주공아파트209-1002
電 話 : 042-629-7338 / 010-3412-4054
e-mail : larecancile@hanmail.net / larecan@hotmail.com